ねこじたトリニティ

猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねこじたトリニティ

【Ｎコード】
Ｎ０７７７ＢＡ

【作者名】
猫

【あらすじ】
気がつくと子猫と一緒に見知らぬ場所にいた。そこは『スキルカード』で成長する不思議な世界。冒険者ギルドに入り、カードをそろえて強くなっていく主人公のお話です。

第０１話　子猫

目が覚めると、僕はのどかな野原に寝ていた。かたわらに子猫も寝ていた。僕が動いたのに起こされたのか、やがてその子猫も起きた。なぜかやたら擦り寄ってくる。そっとなでてみる。

綿毛のついた雑草があったので、それで子猫をじゃらしてみる。夢中になって飛びかかる子猫に思わず顔がほころぶ。

子猫と遊びながらあたりを見回す。見覚えのない場所だ。野原の周りには木々が生い茂り、特に人工物も見当たらない。どこか自然公園だろうか。

持ち物を確認する。いつもの普段着のほか、何も持っていないようだ。

やがて林の向こうに人影が見えた。とりあえずそちらを目指して歩き出してみる。僕が歩き出すと子猫もついてきた。懐かれてしまったようだ。まわりに親猫の姿は見られない。どうしようか迷ったが、とりあえず保護することにした。僕は子猫をやさしく抱きかかえた。

林を抜けると石畳の道が連なっていた。巨石があちこちに転がり、苔むすその様は、まるでどこか観光地にでも来たかのように錯覚する。林を抜ければここがどこか分かるかと思っていたが、ますます分からなくなってしまった。

やがてその人影のもとにたどり着く。それは見慣れぬ服を着た女の子だった。休憩していたのか大きな岩を背に座っている。麦藁帽子をかぶり、何か農具らしきものを抱えていた。まとめた黒髪、あまり化粧もしていなさそうな日に焼けていない白い顔、そのときは純朴な娘さんという印象だった。

「こんにちは。」と声をかける。

「すいません、この子の親猫知りませんか。それから僕、迷っちゃったみたいで、ここどこか教えていただけませんか。」

しかし言葉が通じなかった。女の子も身振り手振りでなにやら訴えかけてくるが分からない。やがて子猫が「ミャー」とないた。すると女の子は目を丸くして僕の手の中の子猫を覗き込む。やたら抱きたさそうにしているので、そっと手渡す。

女の子は子猫をみつめ、「ニャーニャー」と言い、応じるように子猫も「ミャーミャー」言っている。まるで会話でもしているかのようだ。

この後どうするか困っていると、女の子に腕をつかまれた。にっこりと笑いながら軽く腕を引かれて、歩くように促された。どこか人のいるところに連れて行ってくれるのだろうか。あるいは親猫の居場所なり飼い主なりを知っているのか。子猫は女の子が抱いたままだし、いつの間にか幸せそうに眠っている。まあいいかと、少しばかり不安になりながらも僕は歩き出した。

石道が続く。自然にできたのかあるいは誰かが手を入れたのか、巨大なアーチや石塔が並ぶ。景観に驚嘆を覚えつつ、きょろきょろとあたりを見回しながらも女の子に並び歩いていく。やがて女の子は、石を積み上げた古風なたたずまいの家の前で歩みを止めた。

扉を開け、家に入り、椅子をうながされたので座る。子猫を渡されたので預かると、女の子は部屋を出て行った。茶でも出してくれるのかと思い、おとなしく待っていることにした。

しばらくすると、子猫用のベッドらしき小さなかごと、何やら薄いカードらしきものを持ってきた。かごには食事と水を入れた器も入っていた。促されるまま子猫をベッドにそっと移す。子猫は幸せそうに眠っている。

それを見守った後、彼女はカードを胸にあてて入れるような仕草を僕に見せる。僕にもやってみろと渡されたのでやってみると、不思議なことにカードは体の中に吸い込まれていった。突然のことに驚き、説明を求めようとしたが言葉が通じない。彼女は笑ったままだ。いつの間にか用意してあったお茶を勧められる。彼女が落ち着

いていることと、体に異常もなさそうなことから、お茶にも害はなさそうと判断してお茶を飲むことにした。
やけに美味しいお茶だ。うっすらと甘く、清々しい香りとまろやかな苦味がのどを潤す。一つだけ難点をあげるとすれば、少しぬるいことくらいだが、おそらくこれが適温なのだろうし、何より猫舌の俺にはありがたい。

お茶を飲み、少し落ち着いてきた頭でこれまでのことを考える。そういえばカードに何やら書かれていた。見たこともない字だった。あれは何だったんだろうとしばらく思案していると、彼女が話しかけてきた。
すると、その言葉が、分かるように、なっていた。
「どう？　そろそろ喋れるようになったと思うけど。」
事態がよく飲み込めない。ひとまず浮かんだ疑問を投げかける。
「えーと、なぜ言葉が突然分かるようになったの？　それより、あの子猫は君のかい？」
それを聞き、僕が喋れるようになったのを確かめると、彼女は話を続けた。
「んー、どこから説明すればいいのかしら。とりあえず、あの子は迷子で、しばらくうちで育てることにしたわ。」
子猫の引き取り先がみつかって安心した。おそらくこの人なら大丈夫だろう。なぜかそう思えた。
「それから言葉が通じるようになった理由だけど、『スキルカード』って分かる？」
彼女が解説してくれたところによると、僕が突然言葉を理解できるようになったのは、スキルカードというもののおかげだそうだ。そんな突拍子もないことがあるわけがないとはじめは思っていたのだが、実際にこうして言葉が分かるようになった以上、信じるしかない。
カードにはいろいろ種類があるそうだ。剣術や魔法が使えるよう

になるものから、基礎的な体力が強化されたり、何かものを作るのが得意になったりするらしい。
　先ほど入れたカードは『マタータービ語』のカードで、1年ほどこの地で生活したくらいの話力が身につくとのこと。語彙もそれほど増えるわけではないが、普段生活するには十分なレベルであり、読み書きもできるようになるという。
「自己紹介がまだだったね、私の名前はマールマール。マリーって呼んでね。」
「えーと、僕は……春人、春人夜色です。ハルトとでも呼んでください。」
　その後もいろいろと話をきいた。ここがどこかとか、地球を知っているかとか、今はいつかとか。それで聞いたことを総合してまとめると次のようになる。

　どうやら僕は異世界に紛れ込んだらしい。

第０２話　カードスロット

僕が異世界に紛れ込んだのではないかと最初に推測したのはマリーさんだ。この世界にはそうやって訪れるものがわりと多いらしく、いろいろな世界から迷い込む人がいるという。そうやって来たものは『漂流者』と呼ばれているそうだ。

時として悪意あるものが漂流者としてやって来ることもあるという。それは人でないときもあり、モンスターとして居ついたりするらしい。しかしいずれにせよ冒険者ギルドにより討伐クエストが発令され、遅かれ早かれそういったものたちは排除されるそうだ。

異世界に来てしまったこと、戻れない可能性が高いことに僕は戸惑った。元の世界でやり残したこと、やりたかったことがたくさんあるように思えた。それよりもこれから先、この世界でどうやって生きていけばいいのかということに、主眼を移して考えねばならないのだろうけど、気持ちの整理がつかない。

僕が不安定な心情を汲み取ってくれたのか、マリーさんが話を振ってきてくれた。

「ハルトさんもしばらくこの家で暮らしてくれていいわ。もちろん何か働いてもらうけどね。」

どうやって働くのかなど、僕のこの後の生活についてマリーさんと話をした結果、僕は冒険者になることになった。冒険者になるのにもいろいろ費用がかかるみたいだが、彼女が立て替えてくれるという。そのかわり、僕の着ている服を預けてほしいとのこと。裁縫を嗜むそうで、この世界では珍しいこの服に興味があるようだ。しきりに観察される。どちらにしろその格好では目立つからと、彼女手作りの服を渡されたので着替えた。

「すごいわこの縫い目！　この生地も！　……お金払えなさそうだったら、代わりにこれを頂戴ね。」

マリーさんは上機嫌である。それをしまいこむ動作の端々から喜

びのオーラがにじみ出ているようだ。
「さて一緒にギルドに行ってもいいけど、子猫ちゃんが心配だしちょっと留守番しててもらえるかしら。係の人を呼んでくるわね。１０分ほどで戻ると思うから、よろしく頼んだわよ。」
そう言って鼻歌交じりのマリーさんは、冒険者ギルドに向けて出て行った。さて僕はどうするか。仕方ない、子猫でも見守って時間をつぶそう。いまだに少し不安な僕を尻目に、子猫は安心しきった表情で寝ている。……子猫の名前でも考えるか。

しばらくしてマリーさんは猫耳をつけた女の人と戻ってきた。タミーさんと言うらしい。よく見れば猫耳だけでなく全体的に猫っぽい。仮にマリーさんを黒猫とすれば、タミーさんは虎猫だ。金色に輝く毛並に触れたい誘惑に駆られる。それを抑えつつ、一通り挨拶をすませ、子猫も紹介してから、僕はタミーさんと冒険者ギルドに向かった。……タミーさんは子猫にご執心だったが、寝ていて起きないのであきらめたようだった。
「あの、タミーさんは、……猫、なのですか？」
「そうだにゃ。由緒正しきネコビト族の末裔だにゃ。それよりも子猫かわいかったにゃー。もう名前は決めたのかにゃ？」
感情表現の豊かな猫耳を見つめつつ、猫耳をさわりたいとか、モフモフさせてほしいとか、いろいろ欲求がつのったが思いとどまる。
その後も街の中の目印やら何やらを解説してもらいながら歩く。ほとんど一本道だったので迷うことはなさそうだがありがたい。やがてギルドに着いた。小さな看板のついた趣のある古い建物だ。中に入るとあちこちの壁が暖かそうな絨毯で飾られていた。
「じゃあ準備をするから、そこで座って待っててほしいにゃ。」
示された椅子に座り、彼女を待っていると、やがて何かを小脇にかかえて戻ってきた。
「ではまずこの二枚のカードを入れるにゃ。」

二枚のカードには、『感知：自己感知　レベル０１／２０』と『補助：カード操作　特殊』と書かれていた。言われるままそれを自分に差し込む。

「自己感知のカードで自分のことが詳しく分かるようになるのにゃ。ついでにカード操作のカードで自分にインストールされているカードを操作できるようになるにゃ。」

スキルカードを体の中に入れ、５分ほどすると定着してその効果が使えるようになるそうだ。それまでの間、いろいろ話を聞いた。

まずカードの種類。基礎、脚力、武術、魔法、補助、感知、製作の七種類が基本らしい。そして人間にはそれぞれに対応した『スロット』があり、種類の違うカードは入れられないそうだ。スロットの数は人によってまちまちで、魔法のスロットが多い人、製作が多い人などといろいろあるそうだ。そのスロット数の多寡によって、職業の適性を量るらしい。

「スロットにはほかに『フリー』のスロットもあるにゃ。」

フリーのスロットには、ほとんどのカードを入れられるが、その代わり、『カードが成長しない』のだという。

「カードが成長？　どういうことですか？」

「んー。カードが成長すると、効果が大きくなるにゃ。上位の魔法が使えるようになったり、体力強化のカードならさらに上昇量が増したりするにゃ。大雑把に言うと、より強く、より早く、より精確になっていくにゃ。」

「なるほど。」

「さっき言った基本の７種類がその成長枠にゃ。成長スロットとも言うにゃ。それから今言ったフリー枠、そして最後に保存枠ってのがあるにゃ。これはカードを保存しておくためだけのもので、カードを入れても効果は出ないのにゃ。」

やがて唐突に、目の前にウインドウのようなものが開いた。そこにはこう書かれている。

スロット
成長スロット
基礎　空き：１／１
脚力　空き：１／１
武術　空き：１／１
魔法　空き：１／１
補助　空き：１／１
感知　空き：１／１
製作　空き：１／１

フリースロット　空き：０／３
『補助：マターービ語　特殊』
『補助：カード操作　特殊』
『感知：自己感知　レベル　０１／２０』

保存スロット　空き：３／３

「それがハルトしゃんのカードスロットの現状にゃ。『カード操作』か『自己感知』で見えるようになるのだにゃ。さて、スロットの空きがどうなっているのか教えてほしいにゃ。」
「成長枠が１ずつで、フリーだけ０ですね。今三枚ささってるから３枠ってことでいいのかな。それから保存枠が３枠です。」
「にゃ！　オール１に３プラス３とにゃ？！」
「はい。」
　これは多分すごいことなのだろう。武術も使え、魔法も使え、さらに製作までこなす。これはひょっとしたら伝説の勇者とかに匹敵するかもしれない。
「どうでしょう？　この場合何の素質があることになりますか。」
と控えめに聞いてみる。
「素質ゼロにゃ……。最低レベルにゃ……。ここまで適性のない人

ははじめて見たにゃ！で……、でも、あきらめたらそこで終わりにゃ。地道に努力すれば人並みくらいにはなれる？　……と思うにゃ。」

散々な言われようである。

「そんなにひどいんですか……。」と落胆していると、タミーさんは説明を続けた。

「んー。まず成長枠は、たいていの人はどれかが2枠あるのにゃ。その2枠がどれかで適性をみるにゃ。たまにどれかが3枠あったりするけど、そういう人はエリートまっしぐらにゃ。フリー枠も保存枠も3枠は最低にゃ。」

ここまで言うと、すこしばかり何かを考えるように間を置き、少しばかり口調を変え、僕を量りにかけるかのように聞いてきた。

「どうして、ハルトしゃんは、冒険者に、なりたいのにゃ？」

第０３話　おかえりにゃ

なぜ僕が冒険者を目指すのか。

正対するタミーさんの態度を見ていると、この質問には真面目に答えるべきなのだろうと直感した。しかし、この単純な質問には、少し複雑な答えが必要だ。僕は少し時間をもらい、マリーさんとの会話を思い出して考えをまとめる。

二、三分考えていただろうか、二人を包んでいた緊張がこころなしかほぐれてきたころ、僕は話し始めた。

「理由は三つあります。まず、スキルカードを獲得できるチャンスが増えるということです。冒険者であれば、クエストの報酬の一環として、スキルカードをいただけると聞きました。冒険者以外と比べて、圧倒的にカードを得る機会が増えるというのは、カードをほとんど持っていない僕にとって、とても魅力的です。」

うなずき静かに聴いているタミーさん。クエスト報酬以外にもカードを手に入れる手段はあるというが、それは非常に限られているという話だ。購入することも可能らしいが、一般に冒険者が報酬として得る場合と比べて、かなり割高なやり方になるという。

「次の理由は、生活のためですね。マリーさんに伺ったのですが、冒険者になれば手っ取り早くお金を稼げるとのこと。特別な技能もスキルカードも何もない僕が、真っ当にお金を稼ぐ手段はこれがベストだという話でした。」

うなずくタミーさん。マリーさんの話だと、雑用などを含めて冒険者ギルドに持ち込まれるかなり仕事は多いそうだ。真面目にやればまず食いっぱぐれないと聞いた。

「最後の理由ですが、僕自身が、冒険者になることに少しあこがれているということです。僕がいた世界では冒険者という職業があり

ませんでした。それはおとぎ話の中にだけある存在でした。幼いころ読んだそれは、危険ではありましたが非常に魅惑的でした。将来は冒険者になるという夢を描いたこともありましたが、あきらめざるを得ませんでした。」

うなずきを止めるタミーさん。やりたいと言うだけでは説得力は低いか。

「つまるところ、効率的なカード収集、金銭的問題の解決、それから僕自身の意思、この三つが理由です。」

タミーさんはうにゃうにゃ言いながら何か考えている。

「正直に言って、冒険者はあまりお勧めできないのにゃ。冒険者はカードの枠数が強さに直結するにゃ。時として命に関わる職業を選ぶよりも、比較的安全な他の道を選んでもいいのにゃ……。とは言え、スキルカードもぜんぜん持ってないみたいだし……、うにゃにゃ……。」

そして少々もったいをつけるように言った。

「しょうがないにゃ、条件をつけるけどそれでもいいかにゃ？」

「はい、ありがとうございます。それで、どんな条件なんですか。」

「まず、通常の冒険者はランクをEからスタートするんだけど、Fランクからはじめてもらうにゃ。Fランクってのは、病み上がりとか、義務違反ペナルティとかの特別な理由がある冒険者がなるもので、いろいろ制限があるにゃ。とりあえず村の外に一人で出るのは禁止にゃ。受けられるクエストもこちらで制限させてもらうにゃ。討伐系の依頼なんてもってのほかにゃ。しばらくの間、雑用をいろいろこなしつつ、カードを集めて強くなってもらうにゃ。」

「わかりました。しばらくの間っていうのはどれくらいでしょうか。」

「にゃー。そうだにゃー。半年くらいって考えとくにゃ。様子を見てテストをして、合格したらEランクに昇格にゃ。」

思ったよりも長そうだ。半年が指し示す期間が分からない。『マ

タービ語』のカード能力ではここまでが限界のようだ。地球の半年と違っていそうだが、あいまいな期間設定をこれ以上明確にするより、ぼかしておいたほうがいいだろう。後でマリーさんに聞いておこう。
「分かりました。勝手に村から出ないことと、受けられるクエストに制限があるってことですね。」
「だいたいそうにゃ。冒険者カードに書いておくから、こっそり村の外に出ようとしたって無駄なことにゃ。」
それから冒険者の義務やらギルドの仕組みやらを教えてもらい、ひとまず冒険者登録は終わった。冒険者カードは後から届けてくれるという。

さて質問はないかと言うので、気になっていたことを聞いてみることにした。
「枠を増やす方法ってないんですか？」
「いくつかあるけどどれもすごい手間がかかるにゃ。手っ取り早いのは薬で増やす方法にゃ。レアな秘薬を飲むと保存枠が一つ増えるにゃ。それと同じくらいレアなお薬を飲むと、保存枠一つをフリー枠一つに変更できるにゃ。そしてもう一度別のお薬を飲んでようやく成長枠に変更できるにゃ。」
「成長枠一つはお薬三回分ってことですか。ちなみにそれらのお薬ってどれくらいレアなんですか？」
「レアとは言っても街で売ってるニャ。ただし、普通の人が真面目に働いてお金を貯めて数年で買えるくらいのお値段にゃ。自力で手に入れるのは難しいからあきらめたほうがいいにゃ。」
なるほど、大きな目標ができた。枠を増やすことだ。とは言えお金がそうとうかかるらしい。ひとまずお金を稼ごう。ちなみにこの方法で増やしたり変更したりできるスロット数は、薬によって増やせる限度数が違うという。例えばある秘薬なら全枠合計２０枠になるまで保存枠を増やせる。しかしそれ以上増やすなら、別のもっと

入手難度の高い薬を使う必要がある、というようになっているそうだ。
「いや待つにゃ、確か合計１６枠まで保存スロットを増やせる方法があったと思うのにゃ。それほど難易度も高くなかったと思うから、そのうち挑戦するといいにゃ。ハルトしゃんは、ええと、オール１で７、足す６で合計１３枠だから……、なんと３回も使えるにゃ！
後で調べておくにゃ。めったに使わないから忘れてたにゃ。」
ちょっとばかり馬鹿にされたような気もしたけど、悪気はないものと信じたい。苦笑しつつ僕はお願いした。
「ありがとうございます。おねがいします。」

質問タイムも終わり、早速何かクエストを受けてみたいと希望してみた。
「初級者向けのクエストで手ごろなのが見つからにゃいにゃ。村から出ればいくつかあるんだけどにゃ。だからまた明日にでも来るといいにゃ。依頼がなかったら何かギルドの掃除でも用意してもらうにゃ。」
掃除か。想像していたものとまったく違うが、しばらくは下積みだ。それでカードがもらえるなら喜んでやろう。
「それよりとりあえず宿題を出しておくにゃ。」
言い渡されたそれは、『カード操作』の能力を使わずに、カードを自由に操作できるようにすることだった。これができるようになればスロットが一つ空くので、必然的にその分強くなれるという。今はまだそもそもスキルカード自体がほとんどないのだが、早めに空けられるようにしておいて損はないだろう。
「説明が難しいけど、『カード操作』の能力で、『カード操作』のカードの能力を使わない設定にしてから、カードを操作するにゃ。」
「うん……、うん……？」
「……まあいろいろ試してみるといいにゃ。念のため警告しておくけど、しばらくの間『カード操作』のカードは外してしまわないよ

うに気をつけるにゃ。」
　これはなんとなく分かる。カード操作ができなくなって詰む、ということだろう。ちょっとばかりタミーさんの説明が頼りない気もしてきたので、後でマリーさんに聞いてみよう。
　しかしカード枠が空けばその分強くなれるというなら、マターービ語も自力で習得した方がよさそうだ。それを聞いてみると「もっともだにゃ」と返された。課題が増えた。

　登録も終わり、質問も終わり、宿題を出され、用事はなくなった。では戻りますと言うと、迷子になったら送ってあげるから戻っておいでにゃと軽口を返された。迷いませんよと答え、言葉どおり迷うことなく無事マリーさん宅に戻ると、子猫がマリーさんと遊んでいた。こちらに気がつき、マリーさんが「おかえり」と声をかけてくれた。
　それに「ただいま戻りました」と僕が返すと、子猫が喋った。子猫が、喋った。

「パパー！　おかえりにゃー！」

第０４話　カードランク

マターービ語とは、つまり猫の言葉らしい。最初にマリーさんと出会ったとき、子猫に「にゃーにゃー」と言っていたのは、子猫が話せるかどうか確認するためだったそうだ。すでに子猫は「ごはんが食べたい」とか「ねむい」とか簡単な意思伝達ができるという。

しかし、猫語を覚えないとスロットが空かないのか。試しにカードを外してみたら「にゃー」としか聞こえないし、難易度が高そうだぞ……。

「一つ一つ簡単な単語から覚えていけばいいわよ。それよりもカード操作の練習がまず先ね。」

そう言えばパパとか呼ばれたことの方が気になる。追求しようかどうか迷っていると子猫がまた喋った。

「ママー！　ごはん食べるにゃー！」

はいはい、とマリーさんは子猫を運ぶ。僕がパパでマリーさんがママか。いつの間にそんな関係になったのだろう。これからマリーさんをなんて呼べばいいのか悩むな。

嬉しいような困ったような複雑な表情をしていたのだろう。マリーさんが睨んでいる。

「アイちゃんのために、私がママ、あなたがパパということになったけど、変な気は起こさないように。」

でっかい釘を刺される。しかもいつの間にか子猫の名前も決まってるみたいだし……。

「とりあえず、ハルトさんの部屋はそこね。好きに使っていいけど、汚さないように。」

「はい。ところで子猫の名前、決まったんですか？」

「うん、アイちゃんだよ。」

「にゃー！　呼んだー？」

「違うの、ごめんね、アイちゃん。」

せっかくいろいろ名前を考えていたのだが、もう認知されているみたいだしあきらめよう。それにしてもまだ何もしていないのに、既に尻に敷かれているような気がするのは何故だろう。やはりカード枠が少ないからか。いやそれは関係ない。ちょっとコンプレックスを持ちすぎだ。

割り当ててもらった部屋には、ベッドと机と椅子があった。壁にはいろいろ収納できそうな棚もある。あちこち部屋を確認していると、聞きなれた声の人が玄関から飛び込んできた。

「こんばんはにゃー。遊びに来たにゃー。」

「あらタミーさん、仕事はもう終わり？」

「うん、今日は早仕舞いしてきたにゃ。子猫に会いにきたにゃー。違うにゃ。そうじゃないにゃ、冒険者カードができたので届けに来たにゃー。」

「そう、じゃあせっかくだし今日は泊まっていくといいわ。」

「そうさせてもらうにゃー。」

「どうぞにゃ」と渡された冒険者カードを受け取る。そこには注記としてこう書かれていた。

注記：村外に出るには保護者いずれかの同伴が必要

保護者　マールマール、ターマターマ

ターマターマとはタミーさんの名前らしい。初めて知った。それはともかく保護者って表記はどうにかならないのか。

タミーさんは子猫と遊んでいる。それを見ながら僕はカード操作の練習に励む。先ほどマリーさんに教えてもらった練習方法だ。まずは『カード操作』の能力でカードを移動し、感覚をつかむ。慣れてきたら無効にして自力で動かしてみる。動いたらそのまま反復練習。動かなかったらまた有効にして動かす。というやり方だ。注意点として、できたと思っても油断しないようにと言い渡された。何か別のことに意識がそれると途端にできなくなるという。

「ハルトしゃんは何やってるのにゃ？」

「カード操作の練習中です。難しいですね。」
「がんばってるにゃー。えらいにゃー。そういえば依頼なかったから、明日はギルドの雑用をしてもらおうと思ってるにゃ。」
僕が戻ってからわりとすぐにギルドを出たのだろうから、依頼など来るはずもなかろうとも思ったが黙っておく。
「わかりました。ちなみに報酬はどのくらい戴けますか？」
「ハルトしゃんはお金とスキルカードだったらどっちが欲しいにゃ？」
「最初のうちはスキルカード優先でほしいですね。ただお金も少しはあった方がいいのかな。」
「じゃあ、半日くらい働いてもらうにゃ。今回は大サービスでカード１枚に１０カリカリつけるにゃ。」
カリカリというのはお金の単位らしい。それにどれくらいの価値があるのかはまだ分からない。しかし出された条件で引き受けた。新米のこの僕が半日働いたくらいでスキルカードをもらえるというのは、おそらく言葉どおり大サービスなのだろう。そうなると１０カリカリはお小遣い程度と思ったほうがよさそうだ。
その後みんなで夕食を食べ、順番にお風呂に入った。寝るまでの時間どうするか迷ったが、もらったノートでマターター語の学習をすることにした。まずは挨拶などの簡単な単語を書き出していく。その横に日本語で対応する語を書く。そして最後に発音の仕方を書く。問題はその発音だ。
「スキルカードの『聞き取り』の機能だけをオフにして、言葉を発してみてね。その言葉を聞こえたまま書けばいいわ。逆に『発音』だけをオフにして、自分で話しているのを聞いてみれば、発音矯正もできるはずよ。」
マリーさんはそう言っていたが、スキルカードの一部分機能の停止が難しいことと、『聞き取り』機能を解除すると「にゃーにゃー」としか聞き取れないことからこの作業は難航した。違いが分からない。どうにも一人では無理だ。また後でマリーさんにコツを聞いて

みよう。
猫語の勉強はあきらめ、カード操作の練習をすることにした。いろいろ試しているうち、眠くなってきたので寝ることにする。慣れないところに来たせいか、一人で寝るのが少しばかりさびしい。しかしいろいろあったせいで疲れていたのか、わりとすぐに寝てしまったようだ。

翌朝。猫さんたちはすごい早起きだ。
「まだ寝てるのかにゃー！　起きるにゃー！」
「にゃー！　起きるにゃー！」
感覚で言うといつもより二時間くらい早い気がする。大きな猫さんと小さな猫さんに起こされ、顔を洗い、いつの間にか用意されていた朝食をみんなで囲む。昨晩の夕食もそうだったが、どの料理も適度にぬるい。猫舌の僕が嬉しがるくらいなので、世間の常識からすればもう少し温かいほうがいいのだろう。
今日の僕の予定は、午前中ギルドで雑用をこなし、お昼に帰ってきて休憩後、家の雑用をすることになっている。子猫のアイちゃんの予定は、午前中ギルドでタミーさんに遊んでもらい、お昼に僕と帰ってきて、午後からマリーさんに遊んでもらうのだそうだ。
「肉体労働だけどがんばるにゃ。鍛えておいて損はないにゃ。冒険者は体が資本にゃ。」
そんなことを言われ、荷物の大移動をさせられた。書類が多いのかやけに重い。休憩を挟みながら午前中いっぱい働いた。まだ荷物が半分以上残っている。
「いやー助かったにゃ。明日もまたやってもらうにゃ。」
「パパおつかれにゃー。」
「さて、報酬を渡す前に、今日はカードランクの説明をしておくにゃ。」
聞いた話をまとめると、スキルカードには『ランク』があるとい

う。低いほうから並べるとカッパー、シルバー、ゴールドとなっている。さらにそのそれぞれで、コモンとレアに分かれる。つまりカッパーコモンからゴールドレアまで6段階あるということだ。当然上のランクのカードの方が強いカード、便利なカードになるという。

「報酬で獲得できるカードはすべてのランクの中からランダムにゃ。だから運がよければすごいカードを手に入れられるかもしれないにゃ。」

ちなみにカッパーレアの出る確率はだいたい7分の1だそうだ。一つ上のランクのカードが出る確率は7分の1ずつ減少し、シルバーコモンが出る確率はおよそ50枚に1枚。ゴールドコモンなら2500枚に1枚だという。

それを聞き、手持ちのカードを確認する。『カード操作』と『自己感知』がカッパーノーマル、そして『マターター語』がゴールドコモンのランクだった。ひょっとしてすごい価値のあるカードかもしれない。2500枚に1枚のカードだ。早いところ言葉を覚えて返したほうが良さそうだ。そのあたりのことをタミーさんに聞いてみることにした。

「言語のカードは需要があるからお高いにゃ。商人をはじめ必要としている人は多数にゃ。『マターター語』のカードの相場は知らないけど数万カリカリの価値があると思うにゃ。」

そんな高価なものだったのか。マリーさんに感謝せねばなるまい。

「ただ、一度カードをインストールしたら、再度カード化するにはコストがかかるにゃ。一般的な方法だとカード化用のアイテムを使うにゃ。でもそのアイテムのお値段はお高いのにゃ。ゴールドコモン用再カード化アイテムだと、数千カリカリくらいしたと思うにゃ。」

これははじめて聞く情報だ。そう言えば昨夜、カード操作の練習でカードを外に出してみようとしたとき、できなかったのを思い出した。寝る前で疲れていたのでそのまま忘れてしまっていたが、カードを出せないのはそういう仕組みだったからか。

カードのランク説明も一段落ついた。「それじゃあこれにゃ」と何も書かれていない、両面が黒いカードを渡された。
「入れてみるまで何のカードが入っているかわからないにゃ。幸運をいのるにゃ。」

僕は早速、それを、そっと胸に差し込んだ。

第05話　初めての報酬

「さて、報酬のカードが何だったのか聞くのは、基本マナー違反なのにゃ。それに限らず、自分の持っているカードは教えちゃだめにゃ。カード構成を知られると言うことは、弱点をさらすのと同じにゃ。もし誰かに聞かれても、これからは言っちゃだめにゃ。もちろん聞くのもやめておいた方がいいにゃ。」

ふむふむ、確かにそうだ。しかし、そう言いつつ猫耳がそわそわと動いている。今差し込んだカードが何なのか興味があるようだ。ランクだけでも教えておくか。

「残念、ただのカッパーコモンのカードでした。」

「そうなのかにゃ。ちなみになんだったのにゃ？」

言っていることがきれいさっぱり矛盾している。ここは試されていると見るべきだろうか。単純にタミーさんがそういう性格なのか。教えてしまったてもいい気もするが悩む。

「先ほど教えちゃだめと習いましたので、秘密です。」

「……う、うにゃ。それでいいにゃ。よく覚えてたにゃ……えらいにゃ……。」

耳がしょぼんとうなだれる。ものすごくしょんぼりとした雰囲気がただよう。少しかわいそうになって思わずつぶやく。

「知りたいですか？」

「教えてくれるのかにゃ？」

耳が元気に反応し、こちらを向いた。期待にうちふるえる眼差しがまぶしい。ふと、昨日スロット数のことで、少しコケにされたようなことを思い出した。仕返しとは言わないが、ちょっといじわるをしてやろう。

「じゃあちょっとだけその猫耳をさわらせてもらえませんか。」

耳がびくんと振るえ、後ろを向く。

「にゃ……、それは……うにゃにゃにゃ……。」

「タミーさんみたいな立派な猫耳って初めて見るんですよ。ほら、僕ってこんな耳でしょ？　だからすごく興味があるんです。」
多分今僕はすごくずるそうな表情をしてそうだ。タミーさんはそんな僕を上目遣いに見て、仕方なさそうに言った。
「うーん、ちょっとだけにゃよ？」
ひょっとしたらいろいろ誤解を生んでしまったかも知れない。だけどいい。ゆっくりと手を伸ばし、タミーさんの猫耳に触れる。緊張しているのかピクピクと震えている。そのままそっと撫でる。
「うにゃ……。楽しいかにゃ？」
「はい、とっても。」
「そうかにゃ……。じゃあ今日はここまでにゃ！」
そう言ってタミーさんは逃げるように後ろに飛び跳ねる。しまった、もう少しさわっていたかったのに。
「さあ約束のものを出してもらうにゃ！　嫌とは言わせないにゃ。」
まだ耳が倒れている。よっぽど恥ずかしかったのだろうか。それを隠すようにちょっと強気を装っているようだ。
「はい、ちょっと待ってくださいね。」
そう言って僕は先ほど引いたカードだけを目の前に表示させた。マリーさんから教わったやり方だ。ウインドウを表示する機能を一部分解除して、特定のカードだけを表示させる方法である。『カード補助』の能力を使っても少し難しい。上級者向けの操作だ。
「にゃー！　もうそんなやり方覚えたのかにゃ！　すごいにゃ。」と感心したあと、「どれどれ、よく見せてみるにゃ。」と隣に擦り寄ってくる。
タミーさんが顔を寄せて覗き込む。そこにはこう書かれていた。

『カッパーコモン
脚力：運搬力上昇　レベル　０１／２０
注記　フリースロット不可』

「おー、これは当たりだにゃー！」
「そうなんですか？」
「たくさん運んでもらえるにゃ。」
当たりというのはタミーさんにとっての話なのだろうか。本当は魔法のカードが欲しかったのだが、これはこれで便利そうだ。早速それを脚力スロットにセットしてみた。心なしか身が軽くなったような気がする。いや、５分後に効果が出るんだったか。
フリースロット不可というのが少し気になる。そういえばこのカードはフリースロットではなく保存スロットに入っていた。おそらく脚力スロット専用なのだろう。念のためタミーさんに聞いてみた。
「フリースロット不可のカードはフリースロットに入れられないにゃ。脚力のカードは不可になっているものが多いにゃ。ほかにも時々フリースロットに入れられないカードがあるみたいにゃ。そうそう、魔法カードもほとんど不可だにゃ。」
なるほど、脚力と魔法は特別なのか。これは覚えておこう。
「にゃ。それから判別済みのカードはフリースロットに優先で入るけど、未判別のカードは保存スロットに入るのにゃ。」
そういったわけで、保存スロットがいっぱいになっていると、未判別のカードは入れられないらしい。そう言えば最初にマリーさんがカードを入れる仕草を見せてくれたとき、カードがマリーさんに入らなかったのは、おそらくこの応用だったのだろう。
「ちなみにこれってどのくらい効果があるんですか？」
「にゃー。１０パーセントくらいかにゃあ。カードによって効果量が違ったと思うので詳しくは分からないにゃ。感知系のカードレベルが高くなると、詳しい効果がわかるようになったりするから、それまでお預けにゃ。」
僕の持っている『自己感知』のカードでも、レベルが上がれば詳しい数値がわかるという。しかしレベルが上がらない。成長スロットにカードをさしているだけで、勝手にレベルが上がるが、スキルを使ったりモンスターを倒したりすればその分早く成長するという

話だった。まだ二日目、もう少し気長に待ってみるか。
「脚力系は便利にゃ。レベルを上げておいて損はないにゃ。特に運搬力上昇は重装備ができるから戦士系に人気にゃ。それ以外でも運搬用に需要は高いにゃ。」
なるほど、少なくとも汎用性の高いカードだ。しばらくはこのカードで十分だろう。

さて報酬ももらえたし、そろそろ帰ることにする。もらったお金をポケットにしまい、アイちゃんを探す。
「そう言えばアイちゃんはどこですか？」
「遊びつかれてベッドで寝てるにゃ。」
僕はタミーさんに挨拶をして、かごのベッドごとアイちゃんと家に戻る。タミーさんはアイちゃんと離れたくないようだった。ギルド前まで見送りに来てくれた。もちろんアイちゃんのためにだが。
おそらくタミーさんは、アイちゃん目当てで夕方ごろまた来るだろう。何か理由をつけて。そんな気がする。

戻るとマリーさんが食事の用意を済ませていてくれた。
「おかえりなさい。」
「ただいま戻りました。」
アイちゃんはまだ寝ている。テーブルの上にそっとベッドを乗せ、手を洗い、僕も席に着く。
「それで午後はどうしましょうか。」
「うーん、掃除とか洗濯とかでもしてもらおうかと思ってたんだけど、食料の備蓄が足りないのよね。だから予定変更。午後はアイちゃんを預けて、二人で狩りに行きましょう。」
そうだろうな。今までマリーさん一人分で済んでいたところに、僕とアイちゃん、タミーさんまで加わったのだ。あっという間に食料が減るだろう。
「でも、タミーさんから聞いているかと思いますが、僕は役に立ち

ませんよ。」
「荷物持ちにはなるでしょ？　大丈夫よ、危険なところには行かないから。」
ちょうど運搬力上昇のカードも引けたところだ。荷物持ちなら任せてください。そう言いたかったが黙っていることにする。カードの能力があるとは言え、どう考えても僕の素の能力はこちらの世界の人と比べて低そうだ。見栄を張るのはやめておこう。
そういったわけで、午後は急遽狩りに行くことになったのだった。

第０６話　ハント

食事をすませ、準備をしてから僕達は出かけた。途中、ギルドによりアイちゃんを預ける。よっぽどアイちゃんがかわいいのか、タミーさんは快く引き受けてくれた。
「いつでもまかせるにゃー。」
ついでに食料調達目的のこの狩りも、クエストとしてやることになった。狩りの対象はウッサーラビットといって、畑を荒らす害獣だ。もちろん狩るのはマリーさんで、僕はその補助、単なる荷物持ちということになる。カードをもらえそうな雰囲気なので聞いてみた。
「１０体ごとにカード一枚の報酬を出すにゃ。」
その名前からしてウサギなんだろうから、数え方は羽の方がいいんじゃないかと一瞬思った。しかし、そもそも猫語で会話しているのだし、気にしないことにした。それにひょっとしたらウサギじゃないのかもしれない。
「じゃあ２０体目標ね。そうすれば一枚ずつカードが引けるわ。」
「マリーさんならいけそうにゃ。がんばるにゃー。」
軽々しくそんなことを言う。２０体って大変じゃないのか？

手続きを済ませ、ギルドを出て大通りを歩く。そういえばまだ村の中をよく把握していなかった。いろいろ店が並んでいる。いくつか食料品店が続き、その合間に武器の並んだ鍛冶屋、こまごまとしたものが並ぶ雑貨屋、色とりどりの服が並ぶ服屋らしき店などが連なる。それにしてもやけに猫っぽい人が多い。猫耳だけの人もいれば、タミーさん並みにかなり猫らしい人までいろいろだ。
しかし小さな村なのか、すぐに商店街は途切れ、門の前に出た。そこには門番らしき二人の男が立っていた。彼らは普通の人だった。
「こんにちはオルさん、ソラさん。」

「やあマリーさん、狩りかい？　そっちの坊主は見ない顔だな。」
「はじめまして、ハルトと言います。これが冒険者カードです。今日はマリーさんの荷物持ちということで付いて来ました。」
「ふむ、Fランクか。保護者だと……、まるで子供だな。まあいいだろう。無理するなよ。」
やっぱり保護者付きというのは子供扱いされるのか。微笑みかけられたと思うのだが、笑われたようにも思える。こちらも笑顔を返し、カードを返してもらう。一礼して門を抜ける。
門を出ると、周りには畑が広がっている。麦か何か金色の穂がひしめいていた。村は高台の上にあるようで、景色が一望できた。村から続く街道は、金色の平原を一直線に割り、さらに野原を抜け、その先の森の中へと吸い込まれるように伸びている。

「まずはパーティを組みましょう。手順はさっき教えたとおりね。」
マリーさんが両手を広げている。僕も両手を出すと、その手をぎゅっと握られた。
「じゃあ、『パーティ結成』ね。」
「『結成承認』します。」
マリーさんがキーワードを言い、僕もそれに続く。これでパーティを組めたはずだ。
すると突然頭の中に何かの情報が飛び込んできた。大きな球体の真ん中に緑の点、そのそばにもう一つ緑の点。そしてグレーの点が、球体の中にまばらに点在していた。
「私のスキルカードの能力で敵と味方の位置が分かるようになったと思うわ。私の『敵＋味方位置探知』のカードと、『探知情報共有』のカードの能力ね。」
まるでレーダーだ。緑が味方で、グレーが中立の存在だという。敵対状態になると赤くなるそうだ。パーティメンバー以外の存在は、ひとまずグレーで表示される。そのためその正体が敵なのか味方なのかは、実際には出会ってみないと分からないらしい。

また、点の大きさで対象の大きさがある程度わかるという。確かによく見ると光の大きさが違っている。範囲内ならば虫や何かの小動物もすべてまとめて感知してしまうが、感度を調節したりすることで気にならないようにできるという。多分それは高度なテクニックなのだろう。

ちなみに村には探知妨害の仕組みが施されているそうだ。そう言われよく見ると村全体が白い幕のようなものに覆われ見えなくなっている。プライバシー保護や防犯のためらしい。振り返り、門までの距離を確認する。十メートルくらいだろうか。探知レーダー上の見えなくなっているところとの距離から推測すると、探知できる範囲は軽く百メートルを超えるだろう。かなり広い。

「じゃあ狩りの前に注意事項ね。私の側を離れないこと。戦おうとしなくていいわ。ひとまず見てるだけで大丈夫。基本一体ずつを弓で狙って倒していくから、襲われることはないわ。万一撃ちもらして近付かれたとしても、私が剣で倒します。そのときは私の少し後ろに隠れていてね。ここまでいいかな？」

僕はうなずく。

「それから、もし巨大なグレーの反応が出たらすぐに教えてね。私の索敵範囲ならそんなに急がなくても逃げれば大丈夫なはずよ。」

などとちょっと怖そうなことを言われた。大きなグレーってどんな生き物なのだろう。念のため、探知情報でそのような反応がないか確認する。大丈夫だ、少なくとも僕らより大きそうなものは見当たらない。

「とりあえずあっちの方から行ってみましょう。」

僕らはマリーさんの指し示したほうへと歩いていった。

最初の獲物を見つけた。指差された方角にはかなり大きな目標が見えた。ウサギと言われ想像していたものと違い、まるで猪だ。どのくらい俊敏なのか分からないが、あの大きさで体当たりでもくらったらかなり危なそうだ。僕は少し恐怖を感じた。

気が付くと、マリーさんは射撃の構えに入っていた。足場を固め、背筋を伸ばし、矢をつがえ、引き絞り、狙いを定めると、そっと矢を放った。それは静かに、流れるように終わった。マリーさんの集中力が伝わってくるかのようだった。気が付くと、マリーさんは二射目を構えている。そして、それを、放った。

探知情報から反応が消えた。無事倒したらしい。無言のまま、僕達は反応があった場所に歩み寄る。そこには矢と大きなカードが残っていた。カードには『ウッサーラビットの肉』と『ウッサーラビットの耳』と書かれていた。肉のカードが二枚、耳が一枚だ。ドロップアイテムはカードになるらしい。仕組みは分からないが、僕は少しほっとした。

カードを僕の背負い袋に入れる。カード化されていてもかなり重い。一枚数キロはあるだろう。二人だから半分ずつ持つとしても、割り当ての１０体分を持てるかどうか心配になった。

矢は回収するが、後で廃棄するらしい。ぱっと見使えそうでも、歪みが入っていたり曲がっていたりすることがあるそうで、精確さに欠けるそうだ。

狩りは思っていたよりもスムーズに進んだ。探知のカードがあるお陰で効率よく獲物を狩れるのが大きかった。

「位置探知のカード便利ですね。」

「そうね。狩りをするなら、ほぼ必須とも言えるわ。それにそれ以外でも役に立つことが多いから、他に育てたいカードがあっても、一枚はキープしてレベルを上げておいたほうがいいわよ。」

ちなみに『情報共有』のカードのランクは、ゴールドレアだそうだ。それで他の仲間のスロットが少なくとも一枠空くのだから、その価値は十分あるだろう。

一時間ほど狩り、一度戻ってオルさんたちに獲物を預ける。そして今度は道の反対側へ向かう。

ウッサーラビットが二体いるところを見つけた。さてどうするのかと思っていると、そちらの方へ近付いていく。やがて射程距離に入る。マリーさんは立ち止まる。これまで一体二射ずつで確実に仕留めてきた。二体同時にやるのだろうかと思って見ていると、マリーさんはつぶやいた。

「そう言えば、猫耳に興味があるんだってね？」

射撃の体制に入っているマリーさん、邪魔してはいけないから黙っている。なんだか、少しばかり怖い。

「あんまり女の子に変なことをしちゃだめよ。」

続けざまに二本放たれた。一体は倒したが、もう一体がすごい勢いで駆け寄ってくる。腰に履いた剣を抜き、しなやかに構える。迫り来るウッサーラビットも怖いが、マリーさんも同じくらい怖い。

「おイタしてるとこうなっちゃうからね。」

地響きを上げ襲い掛かってくるそれに、振り上げた剣を降ろす。風を切る音と、何か鈍い音が聞こえ、ウッサーラビットが大地に沈む振動が伝わってきた。僕はいつの間にかそこにへたり込んでいた。

土煙が舞う中、マリーさんは微笑みながら言った。

「返事は？」

ごめんなさい。もうしません。許してください。

数時間たっただろうか。だいぶ日も傾きかけてきたころ、狩りは無事に終わった。

マリーさんは僕の倍くらいの荷物を持って軽々と歩いている。カードで強化しているのか、それとも素の力なのか、どちらにしろすごい。そしてちょっと怖い。これまでマリーさんのことを、ちょっと素敵なお姉さんのように思っていたが、狩りに出てそれはだいぶ変わった。頼れる姉御、怖い女ボス、そんな感じにランクアップだ。これからは態度を改めようと思う。もう二度と逆らいません。

ギルドに戻るとアイちゃんが腕の中に飛び込んできた。そのまま

抱っこしてなでる。アイちゃんはゴロゴロと喉をならして幸せそうだ。

タミーさんに『ウッサーウサギの耳』のカードを渡す。枚数を確認してもらい、スキルカードを二枚渡される。

そのうちの一枚をマリーさんに渡し、僕はもう一枚を早速胸に、差し込んだ。

第07話　二枚目のカード

そのカードのランクはカッパーノーマルだった。そこには『補助：盾　レベル01／20』と書かれていた。何か特別な高ランクカードを引けたらいいなと、少し期待していたのだがそれは甘い夢だった。高ランクでなくとも、先ほど教えてもらった位置探知か、興味のある魔法系のカードが欲しいところだ。それは先の楽しみに取っておこう、そのうち引けるはずだ。少しがっかりしたが、スロットが被らないし、このカードも悪くないだろうと思い直す。

ついでにスロット内のカードを確認する。

運搬力上昇と自己感知のレベルがいつの間にか上がっていた。パーティを組んでウッサーラビットを倒したからだろう。

タミーさんがまた見せて欲しいにゃとせがんできた。マリーさんは黙ったままだ。まさかまた猫耳をさわらせてなどと言えるはずもない。所持カードの情報は隠せと教わった。しかし今の僕は初心者なので、手札を見せて助言をもらった方が良い気がする。どうしようかと思っていると、マリーさんがタミーさんをたしなめた。

「だめよ、プライバシーは守ってあげましょう。」

「うにゃ……。分かったにゃ。あきらめるにゃ。」

さすがにタミーさんも、マリーさんには逆らえないらしい。

「でも保護者は見る権利あるわよね。」

「そうだにゃー！　保護者は偉いにゃー！」

「にゃー！」二人の攻勢になぜかアイちゃんまで加わった。まだ文字は読めないだろうアイちゃん。

保護者の権利か。そう来たか。マリーさんはともかく、タミーさんはどうなんだろうと思いつつ、半分見せるつもりになっていると、マリーさんが条件をつけてくれた。

「とは言えタダ見もかわいそうね、こうしましょう。さっきもらっ

た私の分のカードをあげるわ。そのかわり、それも含めてスロット全部を見せてもらえるかしら。」

さすがマリーさん、飴と鞭の使い方を分かっていらっしゃるようです。でも、スロット全部か。なんとなく恥ずかしい。さらにマリーさんが補足する。

「あまり言いたくないのだけれど、村全体から見れば、ハルトさんは素性の良く分からぬ放浪者、私はそれを引き取っている監督者という立場になるの。つまり私は、村の人に対して、ハルトさんの行動に責任を持たなくちゃいけない。そしてそのためには、ハルトさんの情報をある程度把握しておくことがどうしても必要になるのよ。正当な要求と言ったら言い過ぎかもしれないけれど、そういった事情があることは理解して欲しいわ。」

そう言って苦笑いする。

なるほど、そういった理由もあるのか。確かにそうだなと納得する。

カードを見せるから、代わりに助言をもらえたらいいな、などと自分のことばかり考えていたことを反省する。喜んでお見せしましょう。

そんな次第で、僕は二人にスキルスロットの現状を見せることになった。なんだか成績表を見せるようで恥ずかしい。

スロット

成長スロット

基礎　空き：１／１

脚力　空き：０／１

『脚力：運搬力上昇　レベル　０２／２０』

武術　空き：１／１

魔法　空き：１／１

補助　空き：１／１

感知　空き：０／１
『感知：自己感知　レベル　０２／２０』
製作　空き：１／１

フリースロット　空き：１／３
『補助：カード操作　特殊』
『補助：マターービ語　特殊』

保存スロット　空き：２／３
『補助：盾　レベル０１／２０』

それを見たマリーさんの感想はこうだった。
「オール１だって聞いたときは、まさかと思ったけど、本当だったのね。初めて見たわ。」
「そうなのにゃー！　国宝級なのにゃー！　この驚きをマリーさんと共有できて嬉しいのにゃー。」
この駄猫め……。そう思っていると「ぷ」とタミーさんが吹き出した。
それにつられてマリーさんまで笑い出す。
「だめよ、笑っちゃ失礼よ。」といいつつ、笑いの止まらないマリーさん。
マリーさん……なんだかんだと理由をつけたわりに、本当はこれが見たかっただけなんじゃないですか……。先ほどのお話は何だったのですか……。ちょっと感心していたのに……。
それはさておきタミーさんもひどい。マリーさんには止められているけど、後で何か仕返しをしてやりたい。喉をなでてゴロゴロ言わてやろうか、猫じゃらしで手玉にとってやろうか。あれこれ考えているとマリーさんの鋭い眼差しが飛んできた。すいません、不埒なことを考えてごめんなさい。
僕は話題をそらすことにした。

「そういやカードのレベルが2になったんですよ。」
「あらそうなの。随分早いわね。確か、自己感知レベル2で、自分の体力が数値で見れるようになったはずよ。」
もう少しいろいろわかるようになるのではと期待していたが、先は長そうだ。
「ちなみに平均は１００かな。参考にしてね。」
体力の数値は後で見ておこう。平均以下なのは間違いない。見せろと言われず助かった。いや今のこの空気で見せる馬鹿はいないだろう。

「さて、それじゃどうぞ。」とカードを渡される。僕はそれに希望を託す。
「いいカードが出ても、返してなんて言わないでくださいね。」
「んー。そんなこと言われると返して欲しくなっちゃうなー。まあいいわ、ゴールドまでなら我慢しましょう。」
タミーさんから最初に聞いた話では、カッパー、シルバー、ゴールドにランク分けされるという話だったが、超高ランクカードとしてさらにその上があるそうだ。ミスリル、アダマンタイト、オリハルコンというランクの存在が確認されているらしい。それはさておき、ゴールドが出る確率って確か２５００枚に1枚とかじゃないですか。さすがに出ませんよ。
「聞いたかにゃ？　あの余裕、あれはおそらくミスリルを何枚か持ってるにゃ。」
タミーさんがそっと耳打ちしてきた。そう言えば気前よく猫語のゴールドカードを提供してくれたなと思い出す。『情報共有』もゴールドという話だったし、かなりランクの高いカードを溜め込んでいそうだ。

話が少しそれたが、タミーさんが急かすので、カードを入れてみ

ることにする。
僕はカードを胸に入れる。スロットウィンドウが光り、カードが一枚追加された。
そこにはこう書かれている。

『カッパーレア
補助：盾　レベル　０１／２０
衝撃軽減追加＋１０％』

カッパーレアだ。「すごいにゃ。」と声が上がる。確率は7枚に1枚だから、順当かな。しかし盾カードが被ってしまった。無駄になるのではないかと二人に尋ねてみる。
「むしろ同系統のカードが引けたのはいいことよ。二枚差しで効果が重複するから、レベルが低くてもそこそこ使えるようになるわ。それに不要になってもカード融合できるから無駄にならないのよ。」
カード融合とやらを行うと、カードレベルを合成させたり、レベルの最大値を上げたりできるそうだ。ただしカードレベルの合成は同系統でないとできないらしい。
「『盾』のカードには、レベル1で衝撃軽減１０％の能力がついていたと思うわ。だからカッパーレアのほうは素の能力と合わせて２０％になりそうね。仮に二枚装備したとすると、この場合加算ではなく乗算になるから、衝撃を７２％にまで減らせる計算になるわね。」
７２％にまで減った衝撃を、さらに盾で受け緩和する。それでかなり楽になるそうだが、そのあたりは実際に体験しないと分からない領域の話だ。
「すごいにゃー、重戦士になれそうにゃ。」
僕の想像だと、重戦士はスロットがたくさんないとつらいのではないだろうか。僕の限られたスロット数だと、ちょっと固い遊撃くらいのポジションが精一杯だろう。

そうやってあれこれ話しているとき、突然、アイちゃんが言った。
「にゃ、オルにゃんが来たにゃ。」
アイちゃんはどうやら足音で誰が来たのかわかるらしい。さすが猫だ。それよりなぜオルさんを知っているのか尋ねると、午前中ギルドであったのだとか。一度会っただけで覚えてしまったアイちゃんに感心する。アイちゃんは僕の知らぬ間にギルドですっかり人気者になっていたらしい。
「みたいね。」「みたいだにゃ。」と二人もうなずく。マリーさんは探知の能力で分かるのかもしれないけれど、タミーさんも耳がいいのか。猫耳おそるべしである。
やがてアイちゃんの予想通り、オルさんがやってきた。
「オルにゃん。こんばんはにゃー。」
「やあアイちゃん、元気にしていたかい？」
オルさんは挨拶をすませてから、僕達にすまなそうに言った。
「急で申し訳ないのだが、今晩の夜警を頼みたい。」

第０８話　指名

今夜の夜警担当のものが風邪を引いたらしい。こういった場合、冒険者に警備を依頼することが多いという。ただし、緊急を要することであるし、この小さな村では冒険者も少ないので、大抵は指名を行いその抜けた穴を埋めるのだという。

そして今回はマリーさんと、そして僕にその指名が入った。

「ハルトしゃんは朝から働きづめにゃ。かわいそうにゃ。それにまだＦランクにゃ。」

「すまない、それは分かっている。だが人手が足りないんだ。それに働きづめなのはみんな一緒だ。俺もこの後正門側の警備に戻らなくちゃならない。夜間の警備はマリーさん一人にまかせるわけにはいかないんだよ。タミーさん、分かってほしい。」

「うにゃ……。」

タミーさんはまだ何か言いたそうだが、とりあえず引き下がった。マリーさんはオルさんと小声で何か話し合っている。やがてマリーさんがこう言った。

「ごめんね。ハルトさん、私からもお願いするわ。引き受けてもらえないかしら。」

そのとき僕は、夜警なんて安全な仕事だろうと思っていた。だからタミーさんがかばってくれたことも、単に僕の負担が大きくならないように気を利かせてくれたのだと考えていた。

それに、少し前のマリーさんの発言が、胸のあたりに引っかかっていた。それは「村から見ればあなたは余所者」という言葉だ。今度こそ、僕は試されているのかもしれない。そう思えた。

「分かりました。ぜひお手伝いさせてください。」

お世話になっているマリーさんの頼みだし、特に断る理由もないだろう。僕はそう思った。

僕の返答に満足したのか、オルさんはうなずいた。それから僕の肩を叩き、声をかけた。
「すまんね。それからちょいと男同士で話がしておきたい。」
そう言って扉を出て行く。それについて行き外に出ると、オルさんは暗くなりかけた空を見上げながら、語りだした。
「もう分かっているかと思うが、この村は猫族たちの村だ。ネコビト族、ワーキャット、ワータイガーなど、猫科の獣人たちが集まって暮らしている。人間達から逃げるようにこの村にやってきた者もいて、人を恐れているものも多いんだ。これまでいろいろ観察させてもらったが、お前さんがこの村のことを探りに来たのではないことも、害をもたらそうとしていないことも分かっている。ただ、それだけじゃ納得できないやつらも居るわけだ。それにお前さん、漂流者だっていうじゃないか。村が一時、排除派、穏健派、中道派に分かれしまってな。話し合った結果、お前さんが村のために働いてくれるなら、ということでなんとかまとまりそうなんだ。」
そして僕に背を向け、オルさんは立ち去る。
「マリーさん、タミーさん、そしてアイちゃんに感謝しろよ。じゃあな。」
背を向けたまま片手を振り、オルさんは消えていった。事情はなんとなく掴めた。つまり排除派を説得するための材料が欲しいのだろう。そうと分かれば役に立つ男であることを証明してやろう。

ギルドに戻ると、大きな盾が用意されていた。僕の身長ほどの長さがある。
「タワーシールドにゃ。貸し出すから、ちょっと重いけど念のため持っていくといいにゃ。」
たかが警備なのに、いったいどんな敵がくることを想定しているのだと思いつつ、ありがたく持っていくことにする。
マリーさんからも盾を渡された、腕に固定できる小型の盾だ。タ

ワーシールドはどう見ても重そうで、小回りがきかなそうだ。だから小型の盾はありがたいのだが、いくら盾カードを二枚装備しているからとは言え、多過ぎだろう。
「盾は充分なんですが、何か武器を持って行かなくていいんですか？」
「盾二枚差しなら、下手な武器を持つよりこれで殴ったほうが強いわよ。」
そういうものなのか。確かに鈍器として使えそうだが、剣か何かも欲しい。
「下手に武器を持つとどうしても気が緩んで守りが甘くなるのよ。だからそれで充分。」
ということなのだそうだ。何か出ると決まっているわけでもないし、マリーさんも居る。これでいいだろう。

一旦家にもどり数時間仮眠した後、装備を整える。盾のほかに、さらに胸当てと兜を渡され、それらを身に着けた。タミーさんがいろいろ用意しておいてくれたのでとても助かった。そしてマリーさんと再度パーティを組み、準備は完了した。アイちゃんはタミーさんに預かってもらう。

長い夜になりそうだ。人気のない道をしばらく歩いた。こちらのほうは人家が少ないのだという。
「こっちの方は寄り合い所とか、倉庫とか、粉ひき小屋とか、いろいろ施設が多いのよ。」
さらに歩く。建物もなくなり、やがて石の門が見えた。男達が二人、警備にあたっていた。
「交代です、お疲れ様です。」と声をかけると、「ご苦労さん、お先に失礼。」と眠そうな顔で帰っていく。
しかしひどい状態だ。扉は壊れており、門からは外壁が延びていたが激しく痛んでいる。最近つけられたような傷跡も見受けられた。

いくつか壁が崩れているところもある。修復中なのか、材料らしき石材が積んである場所がいくつか見えた。そして僕は、これが危険な任務なのかもしれないと、ようやく気がついた。

「まだ修復が間に合わなくてね。それにこれから収穫の時期と重なってしまって、人手が足りないのよ。『石工』の能力者が少ないのも作業が遅れている原因の一つね。」

しかしこれほどの損害を与えるような敵とは何だったのだろう。

「一ヶ月ほど前だったかしら、村が『分裂者』と呼ばれる一団に襲われたの。元は一人の漂流者だったみたいだけれど、分裂して増える性質を持っていたのよ。それでどこかで数を増やしていたのでしょうね。村は何度も襲撃されたわ。幸いみんなの尽力でなんとか撃退することができたけれど、被害も大きかったの。特にその増殖する性質が分かってからは、残党の掃討にかなりの労力を奪われたわ。村のみんなが漂流者にピリピリしている理由は、そんな経緯があったからなのよ。」

話が少し見えてきた。これまでのことを考えると、オルさんが言っていた『中道派』の意味するところが推測できる。多分、今人手の足りないこの村で、僕を有効に働かせようと考えている人たちのことなのだろう。そういった人たちが排除派と手を組んだら、ひょっとしたら僕は捨て駒として利用されたかもしれない。ちょっと怖いことを勘繰ってしまった。いや、これは少し考え過ぎだろう。

それよりも、今はいい機会だ。感謝の意を伝えておこう。

「オルさんから大体の事情は聞きました。いろいろ僕のためにしてもらっていたようで助かりました。ありがとうございます。」

マリーさんは間違いなく、僕をかばってくれていたのだろう。おそらくタミーさんも、僕に味方していてくれたのだと思う。午前中のギルド内の片付けなんてことより、外壁の修復など仕事はあったはずだ。タミーさんの目の届く範囲に僕を置いて、守っていてくれたのかもしれない。――――――いや、タミーさんは単に楽をしたかっただけかもとも思えてきた……。少し自信がない

……。

「いいのよ。それよりアイちゃんを助けてくれてありがとうね。おそらくあの子もどこか別世界からの漂流者だと思うの。置き去りにせず、一緒に連れてきてくれたことに感謝するわ。本当のことを言うとね、私はあのとき、ハルトさんを村から引き離して、どこか遠くに置いてくるように依頼を受けていたの。だけど子猫を抱いていたあなたを見たら、気が変わってしまったのよ。」

そうだったのか。僕はアイちゃんと出会う偶然がなければ、今頃こうしていられなかったのかもしれない。マリーさんは、僕から顔をそらすと、独り言のようにつぶやいた。

「あなたが私達の仲間を守ってくれたように、私もあなたを守ってあげるわ。」

それからいろいろな話をした。夜は長いのだ。村のこと、季節のこと、僕の居た世界の話、魔法の仕組み、カードの種類、マタービ語のコツ、ほかに広まっている言語の話、人間や猫たち以外の種族のこと。

話をするというより、どちらかと言えば教えてもらったことの方が多かったのだが、時には冗談を交え、楽しい会話であったと思う。

その後、夜食をとった。タミーさんが用意してくれたお弁当である。ウッサーラビットの肉がメインで、パスタらしきものと野菜サラダ、それにスープが付いていた。「タミーさんが作ってくれたのよ」との話に、少し警戒してしまったが、意外なことにどれもこれも美味しかった。

食事も終わり、警備に戻る。ふと、先ほどマリーさんが言った「私達」という言葉が気になった。

「一つ伺ってもよろしいですか？」

「なあに？　あらたまって。」
「マリーさんも、猫なのですか？」
　するとマリーさんは、しばらく考えたあと、僕に一枚のカードを見せてくれた。
　そしてそれを解除した。するとマリーさんの頭に、今までなかった猫耳が現れた。
「そうにゃ、私も、猫なのにゃ。」
「猫耳、さわらせてもらって、いいですか？」
「お仕置きが必要かにゃ？」
　半分本気だったが、ちゃんと冗談と受け取ってくれたようだ。やさしく微笑むマリーさんの顔を見ていると、少しだけ、距離が縮まったように思えた。

　そしてそれはさらにしばらく経ってからのこと。食物がこなれ、少し眠気が襲ってきたころのことだ。
　二人で先ほどと同じように、いろいろ話をしていたのだが、急にマリーさんが口を噤んだ。目つきが険しくなり、真剣に遠くを探るように見ている。ただならぬ気配に何事かと思っていると、マリーさんがつぶやいた。
「囲まれているわね。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0777ba/

ねこじたトリニティ

2012年1月8日21時46分発行